

## 「改革者カルヴァン—魂の渇き」

### イザヤ書 55章1～3節

聖学院大学 人文学部チャプレン 柳田 洋夫

1517年10月31日、ドイツの修道士マルティン・ルターが、ヴィッテンベルク大学の教会の扉に張り出したという「95箇条の提題」から、いわゆる宗教改革が始まりました。しかし、ルターのみによって宗教改革が行われたわけでもありませんし、ルターで宗教改革が終わったわけでもありません。それは、多くの人々に様々なかたちで受け継がれました。また、宗教改革のことを英語では Reformation と言いますが、それは単純に「改革」という意味です。宗教改革というのは、単なる教会のみならず、政治・経済・教育・文化など、あらゆる面において世界を変えた運動であったことをこの Reformation という言葉が示していると言ってもよいでしょう。

さて、そのような大きな改革運動のいわば第二世代の代表的人物として、本日の奨励題にも掲げましたジャン・カルヴァンという指導者がいました。『キリスト教綱要』という著作でも知られています。フランスで生まれたカルヴァンは、主としてスイスのジュネーヴで活躍しました。その後、カルヴァンの改革は、ピューリタニズムという運動を経て、この日本も含めて世界中に大きな影響を与えて今に至ります。

カルヴァンは、一説によれば、ジュネーヴだけでも 4,000 回以上も説教をしたそうで、数多くの説教の記録が残されていますが、その中で、本日与えられているイザヤ書 55 章に基づいた、「靈性の飢饉」と名付けられた説教があります。本日は、その説教を手がかりとして、共に聖書の御言葉を味わいたいと思います。「靈性の飢饉」というのはちょっと難しいタイトルですが、あえて簡単に言い換えてみるならば、これも本日の奨励題に掲げたように、「魂の渇き」もしくは「飢え渴く魂」ということにもなると思います。

ところでみなさんは、自分の魂が飢え渴いている、と感じたことはあるでしょうか。そんなおおげさなことを言われても困るかもしれません。しかし、カルヴァンは言います。私たち人間は、空腹ならば食事をし、喉が渇けば水を飲む、そのような肉体的な飢え乾きについては、自分ですぐにわかる。しかし、私たちの魂を養う「靈的な食物」が不足していることには全然気づくことがない、それはたいへん危険なことであると言います。私たちは、体の飢え乾きには敏感でも、魂が飢え乾いていることにはとても鈍感であるというのです。そして、そのような私たちにこそ、神は、預言者イザヤを通して語りかけてくださっているのだ、とカルヴァンは言います。

イザヤを通して神は最初にこう語りかけます。「渇きを覚えている者は皆、水のところに来るがよい。銀を持たない者も来るがよい。穀物を求めて、食べよ。来て、銀を払うことなく穀物を求め／価を払うことなく、ぶどう酒と乳を得よ」。ここで、水、ぶどう酒、乳というのは、神から私たちの魂に与えられるものです。カルヴァンによれば、私たち人間は、神からの水をいただかない限り、乾きを抱えたまま沙漠をさまよい歩くような哀れな人間です。私たちの多くは、日々いろいろな不安や悩みを抱えていま

すが、おそらく、カルヴァンに言わせるならば、それは、神さまからいただくものではない、この世の不確実で変わりやすいものに私たちはいろいろなものを求めすぎているからである、ということにもなるでしょう。

ところで、神さまは、私たちが「価を払うことなく」、つまりまったくのタダで、私たちの魂の渴きをいやしてくださいと言われます。でも私たちは、タダと言われると、かえって疑いを持ったり、または、ありがたみがないように感じてしまったりするのではないのでしょうか。「タダより高いものはない」という言葉がありますが、結局後で高いものを買わされるのではないかとか、または、どうせたいしたものじゃないからタダなのだろう、とか思うわけです。

しかし、そもそも、タダのものは大したことはない、というのはほんとうでしょうか。それは、とんでもない思い違いだと思います。昔のアメリカの歌に、「The Best Things in Life Are Free」というのがあります。このタイトルの意味は、「人生で最高のものはタダ」ということです。ここでの free というのは、「自由」ではなく、「タダ」という意味です。歌詞の内容をかいつまんでいうとこうです。「輝く月も、星も、春の花も、さえずるコマドリも、太陽の光も、私とあなた、みんなのもの。人生で最高のものはタダ」。こんな歌詞です。美しい自然、太陽の恵み、あと、付け加えるならば、おいしい水や新鮮な空気、そういう、人生で最高どころか、私たちが生きていく上でなくてはならないものは、みな本来タダで私たちに与えられるのです。地球や太陽から請求書が来ることはありません。この歌の最後はこういう歌詞です。「愛もみんなのもの。人生で最高のものはタダ」。愛というのも、タダであるがゆえに尊い、かけがえのないものであるわけで、それに値段が付けられて売り買いされるならば、それはもはや愛ではなくなってしまいます。

そして、やはりタダで私たちに与えられるのが、神さまからいただく、魂の渴きを満たす水です。しかし、それはほんとうはタダではありませんでした。実は、神ご自身が、これ以上はない対価を支払ってくださいからです。御子イエス・キリストという代価です。神は、愛するひとり子イエス・キリストをこの世に遣わしました。そしてキリストは、神のみ旨に従って、私たちの救いのために十字架におかかりになりました。カルヴァンは、このように、キリストがこの世においでになり、十字架にかかれたことにおいてこそ、神は最高の愛を示されたのだと言っています。その主イエスはこう言われました。「わたしが与える水を飲む者は決して渴かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」(ヨハネ4:14)。この世の水は、飲んでもすぐに渴く、しかし、イエス・キリストを通して私たちの魂に与えられるいのちの水だけが、私たちをほんとうに満たすものであるということです。

ところで、ヨハネによる福音書の 19 章 28 節には、こうあります。「イエスは、すべてのことが今や成し遂げられたのを知り、『渴く』と言われた。こうして、聖書の言葉が実現した」。本日与えられているイザヤの預言から、十字架における主イエスの最期まで、「渴き」という言葉が貫かれているのは興味深いことです。主イエスは、私たちの、自分では決して癒すことのできない渴きを癒すために、自らのいのちを十字架でお献げになりました。主イエスが、その最期まで御自ら渴かれた、渴き抜かれた、そのことによって私たちの渴きは癒されるのだ、と聖書は私たちに告げ知らせています。そのようにして、「タダ」の恵みの話は、「ただならぬ」恵みの話になります。私たちには、その恵みに対して支払えるようないかなる持ち合わせもありません。私たちができることは、信仰によってその恵みを受け取ることの

みである、そのことをカルヴァンは強調しています。このことは、ルターから引き継がれた宗教改革の大事なところですが、だからこそ、カルヴァンは、私たちが何かをなすことによって、または何かを持っていることによって神からの恵みをいただくことができる、という考え方に対して、たいへん厳しく反論し続けました。彼に言わせるならば、私たちにできることは、心を空っぽにして、口を大きく、あぐりと開けて、神からいただく水をいただくことだけです。そして、そのとき、神さまは、私たちが必要とするものはすべて備えておられるのだから、不足するものを自分で補おうと心配することもないのだとカルヴァンは言います。

以上、申し上げたことは、みなさんには何か縁遠い話にしか聞こえないかもしれません。しかし、私たち人間は、自分が思っているほど何でもできるわけではないし、強いわけでもありません。そして、魂の奥底では、常に、この世の何ものによっても満たされない飢え乾きを抱えている存在です。その心の深みにおけるほんとうの渇きとまたうめきに気づくとき、聖書のみ言葉は、いつそう強く迫ってくるのではないかと思います。そして、困難に立ち向かって世界を変えたルターやカルヴァンと同じように、私たちも、神のいのちの水によって養われ変えられ強められる、そのような新しい生き方へと招かれていることを改めて覚えたいと思います。

2017年10月6日 聖学院大学 全学礼拝(シリーズ礼拝)